

8 陶磁器生産の町「瀬戸」

I 産業の発展と都市地域の形成

(1) 窯業発展と都市形成

愛知県瀬戸市は、名古屋市の中心部から北東へ20kmほどのところにある。北は岐阜県の東濃地方、東は愛知県の三河地方に接しており、尾張地方の中ではもっとも東側に位置する都市である。「国境いの都市」としての性格は、地形条件によるところが大きく、愛知県の犬山から知多半島にかけて続く尾張丘陵の一部が、瀬戸市と東濃地方・三河地方を区別する役割を果たしている。地形は市内の東部から西部にかけて山地・丘陵地・台地・平地となっており、市内を流れる瀬戸川をはじめとする三つの河川も東から西に向かって貫流している。こうした地形条件のため、主な交通路は名古屋市方面との間を東西方向に走るものが多く、市街地形成も市西部の平坦地を中心に展開している。

瀬戸市の伝統的産業であり、現在もお基幹産業として存続している窯業（陶磁器産業）は、この地方の地質条件と不可分の関係にある。市域中央の大部分を占める丘陵地は、瀬戸層群

とよばれる新第三紀鮮新世の地層であり、これは古生代や中生代の岩石とりわけ花崗岩が風化して堆積したものである。層厚20～30mにおよぶ瀬戸層群の下部には、木節粘土や蛙目粘土とよばれる陶土が堆積しており、貴重な窯業原料として現在も採掘が行われている（図8-1参照）。また、現在はほとんど使われていないが、かつては焼成用の燃料として用いられた赤松などの薪炭は、瀬戸市周辺の山地から供給された。原料や燃料の産出が、この地方に窯業という産業を生み出す大きな要因の一つであったことは疑う余地がない。

周辺部に広い経済的な後背地域をもたない瀬戸は、もっぱら窯業の発展を原動力として都市集落を生み出し育んできた。このため瀬戸では、窯業の発展はすなわち都市の発展であり、両

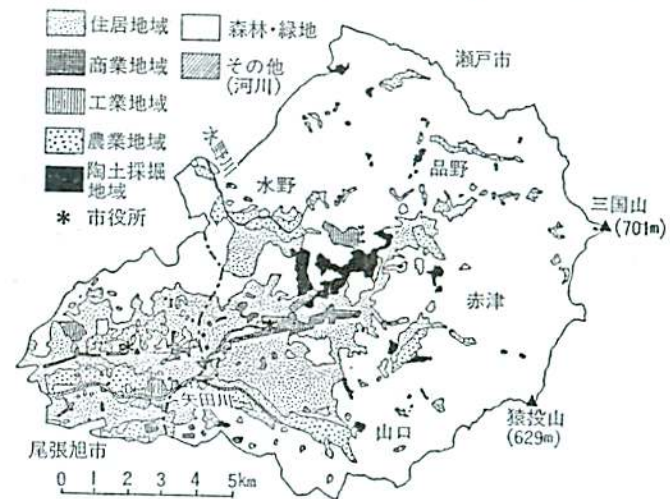


図8-1 瀬戸地域（瀬戸市・尾張旭市）における土地利用現況『瀬戸市活性化ビジョン』（昭和63年）をもとに作成

者は不可分の関係にある。瀬戸の窯業が大きく発展したのは、明治期以降であるが、それ以前にもいくつかの発展や衰退を繰り返しながら生産活動はつづけられてきた。ここではまず、明治期から今日に至るまでの都市地域の展開を、産業の発展と関連づけながら見ることにしよう。

封建時代の保護政策や制約から解放された瀬戸の窯業は、明治政府による輸出奨励政策の下で、海外に市場を求めた。しかし、一時は総生産額の7割にも上った輸出は、生産過剰や粗製乱造による価格暴落を招き、やがて深刻な不況に陥っていった。当時の生産体制は、名古屋の絵付業者をはじめとする問屋制資本に従属しながら、その半製品を製造するというものであった。こうした従属体制から脱却し、産地としての主導権を強めるために、同業者による組合づくりが盛んに行われるようになった。同業組合の設立は、生産資本の育成と海外市場の拡大を通して、産地内部の発展を可能にし、産業発展に大きく寄与した。

窯業の発展に伴い、瀬戸の人口は明治初期から中期にかけて倍増し、このため明治25年(1892)には人口5,381人で町制が施行された。明治38年(1905)には名古屋市との間に鉄道が敷かれたが、これは原料・燃料・製品の輸送にとって大きな役割を果たした。町制施行当時は、洞郷、北新谷、南新谷と呼ばれる四つの大字から成り立っていたが、その後、集落は東部の洞地区から西方に向けて進展していった。しかし瀬戸では、山腹に窯を築いて焼成を行う方式が伝統的にとられてきたため、

古くからの人家は丘陵地の斜面に密集したままであった。

明治20年代になって、瀬戸川の北岸に沿って道路が敷かれると、商人や陶器の下物を扱う業者がこの辺りに集まるようになった。人口が2万人近くになった大正2年(1913)頃には、陶祖をまつる深川神社の西側一帯が商店街や歓楽街として賑わいを見せるようになった。また、対岸にあたる瀬戸川の南側には、町役場・組合事務所・陶磁器参考陳列館・裁判所の出張所・郵便役所などが集まり、さながら行政中心地の観を呈するようになった。ここにはかつて、尾張藩の御用窯で焼かれた製品を検品して納めさせる御蔵会所があった。

これまで傾斜地に集まるようにして建てられていた人家は、しだいに平坦地にも見られるようになったが、これには焼成方法の技術的变化が関係している。すなわち、明治35年(1902)に瀬戸町立陶器学校で石炭窯による焼成に成功して以来、製品は平坦地に築かれた石炭窯で焼かれるようになった。石炭窯は、周辺山地の赤松を伐り尽して遠くは伊勢・紀州方面から高い運賃を払って薪を取り寄せていた当時の瀬戸にとって、



写真 8-1 瀬戸市内中心部を流れる河川と町並み

古い市街地は、市内中心部を流れる瀬戸川に沿って発達し、現在も町並みが残っている。以前は陶磁器を扱う数多くの卸売・小売店が軒を連ねていた。橋のてすりに当たる部分は陶板やタイルで装飾が施されており、いかにも陶磁器の町らしい。

願ってもない技術革新であった。また、大正8年(1919)から利用されるようになった電力は、電動ロクロを用いる成型段階ばかりでなく、製土部門の機械化をも可能にした。こうした一連の技術革新が、瀬戸窯業の近代化に大きく寄与したことは間違いない。

産業の発展に伴う人口増加と、隣接する村々との合併によって規模が拡大した瀬戸は、昭和14年(1939)に市制を施行した。町制施行時に比べて人口は5.8倍に増えたが、農家は全戸数の5%にしかすぎず、工業・商業都市としての性格はますます強まった。この間、第1次大戦中には、交戦国の市場を埋めるかたちで海外輸出を急激に伸ばした。しかし、その反動が戦後に訪れ、市経済は恐慌に見舞われた。昭和恐慌につづく戦時体制の下では、燃料石炭の不足・諸原料の高騰・労働力の徴兵などが生産の障害となり、中小工場は企業整備で消えていった。1,000を超える工場数は僅かの間に100余りになり、操業をつづける工場も石炭代用の亜炭を使い、金属製に代わる陶磁器製の鍋・釜・湯タンポ・ボタン・バッジなどを生産するありさまだった。

(2) 第2次大戦後の都市発展と地域問題

戦後の都市発展 第2次大戦による直接の戦火を免れた瀬戸の窯業は、逸早くその復興に手がつけられた。家庭用飲食器や電熱板などは、戦時中の品不足から国内での需要が大きく、戦後逸早く亜炭や雑木を燃料として焼成された。昭和22年

(1947)に民間貿易が再開されると、ディナーセット・電磁器・ノベルティ(陶磁器製の置物)などが北米を中心として輸出されるようになった。

朝鮮戦争による特需景気は日本経済を復興させ、昭和30年代から始まる経済の高度成長の足がかりを与えた。この時期に瀬戸市は、隣接する水野・幡山・品野の各村を合併し、現在の市域面積(110.34km²)を有するようになった。しかし、豊田・春日井・小牧などの周辺諸都市が高度成長期の機械工業化の波にのって工業生産額を着々と伸ばしていくのに対し、窯業中心の瀬戸市の伸びはそれほど高いものとはいえなかった。ちなみに出荷額でみた場合、瀬戸市では昭和30年(1955)から40年(1965)にかけて3.1倍の増加であったが、豊田市では16.9倍、春日井市では14.2倍、そして小牧市では49.3倍の伸びがみられた。

窯業生産の各段階で専門化が進み、社会的分業体制が早くから確立している瀬戸市では、生産性の低い小規模な事業所によって生産のかなりの部分が担われてきた。事業所当たりの平均従業者数は県平均を下回っており、こうした小規模性は高度成長期にもなくならなかった。現在はいくぶん薄れてきているとはいえ、品目ごとの地区別生産専門化は依然として残っており、伝統的な和飲食器の生産が東部に多いのに対し、ノベルティとよばれる陶磁器製の玩具・置物は中央部から西部(一部は隣接する尾張旭市)にかけて多く生産されている(図8-2参照)。

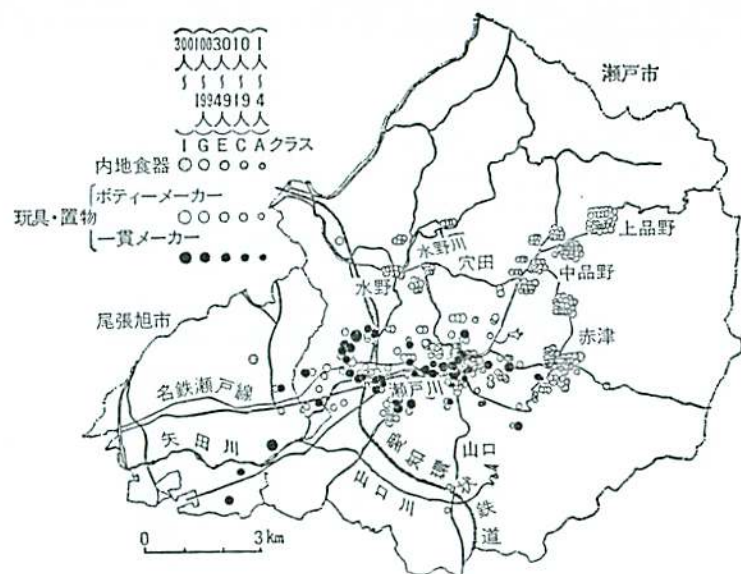


図 8-2 瀬戸地域（瀬戸市・尾張旭市）における陶磁器製造業（内地食器・玩具・置物）の分布
「愛知県陶磁器工業組合員名簿」をもとに作成

「陶磁器生産のデパート」ともいわれる瀬戸市では、多種多様な陶磁器製品が生産されており、その中には近年脚光を浴びるようになったファインセラミックスも含まれている。しかし、陶磁器産業そのものはかなり成熟化した産業であるため、今後大きな成長を期待することは難しい。また、輸出比率が他産地に比べて著しく高い瀬戸の場合、海外市場の不安定な動きに加えて、円高の進展や輸出競争国との競争激化という難問をも抱えている。窯業界の構造的な問題や生産の伸び悩み傾向は、かなり以前から指摘されてきたところであり、昭和30年代の終り

頃から、窯業に特化した産業都市から多様な産業をもった都市へ脱皮をはかる方策が模索されてきた。40年代に入ると、名古屋市を中心とする大都市圏の発展がしだいに明確化した。こうした動きの中で、瀬戸市は「変身」の機会を得るようになった。

大都市圏を構成する一都市としての発展は、名古屋市からの流入人口を受入れる機能と、窯業以外の内陸型工業を受入れる機能の、これら二つによってもたらされることになった。これらはいずれも、地場の資源をもとに内発的に行われてきたこれまでの発展とは対照的な、外的営力に基づくものである。まず前者の人口を受入れる機能としては、昭和43～52年（1968～1977）に市の南部丘陵地に県営菱野団地（182ha；8,100戸）が造成され、また北西部の丘陵地でも水野団地（90ha；1,700戸）が開発された。このため、昭和45年（1970）には13.0%であった市外への通勤・通学率は、60年（1985）には20.5%に高まった。

一方、後者の内陸型工業の受入れについては、北部の丘陵地で企業団地づくりが昭和44年（1969）から始められ、和飲食器・タイルの地場産業のほか電子部品・電気器具・ガス器具・コンクリート製品などの各製造工場が進出した。58.5haの敷地をもつこの穴田企業団地について、その隣接地でも畹企業団地（31.3ha）が造成され、電気部品・輸送機械部品などの工場が立地した。さらに、分譲住宅地化が行われた水野団地の近くでは、既成市街地から立地移転した陶磁器卸売業者が活動を行うための準工業団地（12.0ha）が昭和51年（1976）に完成

した。このようにして産業の多角化が進展するのに伴い、製造業全体の生産額に占める窯業の比率は低下の一途を辿っている。

地域問題 窯業生産と都市発展が不可分な関係にある瀬戸では、地域問題もまた産業の動向と密接な関係にある。中心市街地の北側で現在も掘られている陶土や珪砂（ガラスの原料）の採掘と搬出にさいしては、崩落や粉塵の問題（いわゆるダンプ公害など）がある。採掘範囲の拡大に伴って民家はもとより中学校までも移転させたという話は、この地方では有名である。陶土や珪砂を精製する段階で原料を水^{すい}洗^ひするため、その廃水が河川に流れ込むと白濁状を呈する。製土を用いて素地をつくる段階では浮遊粉塵が発生し、これは珪肺病の原因となる。さらに、焼成の段階で発生する煤煙や硫酸化物は、生産現場以外の人々にも悪い影響を及ぼす。このほか、重油窯の送風機やバーナーからでる音や窯業原料・釉^{ゆうざく}薬をすりつぶすミルの音など、騒音公害もある。このように、生産工程の各段階に各種の公害発生源があるため、瀬戸市にとって公害問題は現在もなお克服すべき問題である。

公害をはじめとする地域問題の発生の根底には、無計画に形成されてきた住宅と事業所の高密度な混在的土地利用がある。本来、高密度な集落形成には適さない狭隘^{きょうがい}な地域に住工混在型の市街地ができてしまった都市の宿命というには、あまりにも大きな地域問題といえよう。こうした地域問題を解決するため

に、様々な試みがこれまでにも実施されてきた。払い下げを受けた元公有地に住宅団地や企業団地を設けることは、産業発展のほかに、居住地や就業地を市周辺部へ広げて、中心部の混雑を抑制するという意味もあった。丘陵で互いに分断されている市内の各集落を連結するための道路づくりも、徐々にではあるが進められてきた。陶土採掘跡地を混在化した市街地の解消に役立てようという動きもあり、今後の成り行きが注目される。

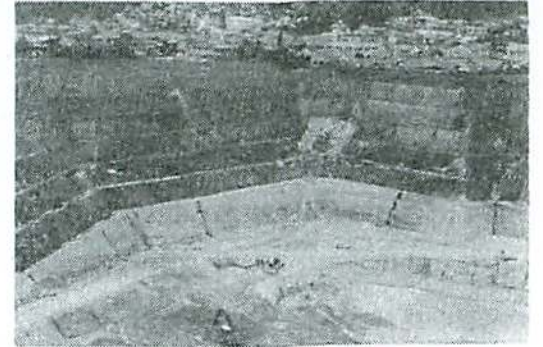


写真 8-2 陶土の採掘場と工場・住宅が混在する風景

中心市街地の北側にある丘陵では、現在も陶土の採掘が行われている。この近くには陶土を水^{すい}洗^ひして粘土をつくる製土工場と、陶磁器を生産する小規模な工場が集まっており、採掘の終わった鉱山跡地や現在もなお採掘が行われているいくつかの鉱山を観察することができる。丘陵地では宅地化も進展しており、工場と住宅が混在する風景が見られる。

II 瀬戸地域の歴史的発展

(1) 中世までの瀬戸地域

先土器時代に人々がこの地域に住んでいたことは、石器類の出土から明らかであるが、住居跡は発見されていない。縄文時代の住居跡は、赤津・品野・山口など市域周辺の地区で見つか

っている。各遺跡からは、土器・石器など多数の遺物が発掘されている。一方、弥生時代の遺跡は品野・山口の各地区から見つかっており、品野地区の鳥原川付近では低湿地で稲作農業が行われていた痕跡が発見されている。さらに古墳時代の遺跡として、各地の有力者を葬った墓が70基ほど見ついている。

律令時代の瀬戸は、尾張国山田郡に属しており、郡の下に10～11の郷があった。瀬戸地域に関係のある郷としては、山口郷・志談郷・餘戸郷などがあり、これらの地名の中には現在も使われているものもある。山口地区には大坪・六反田・柳ヶ坪など、条里制を示唆する地名が残っており、古地図を手掛りにその復元が試みられたこともある。荘園時代には東大寺領地の山田荘となり、さらに12世紀に入るとは、寄進地系荘園が多くなるのに伴い、鳥羽天皇の皇女障子内親王の領地となった。

ところで、やきものの始まりは、古墳時代の須恵器からだと いわれるが、瀬戸市内で現在もっとも古いと考えられているのは、山口地区の広久手古窯群（11世紀頃）である。この古窯群から見つかった瓷器は良質な粘土を用いて丁寧につくられており、木の灰のうわぐすりもかけられている。ここから出土した30種類にもものぼる瓷器は、平安時代の貴族階級のためのものと思われるが、中央の貴族の勢力が弱まるのに伴い、やきものの供給先は在地地主や名主たちになった。

鎌倉時代には、日宋貿易の影響をうけて、黄色のうわぐすりをかけた古瀬戸焼と呼ばれる壺や仏器などがつくられるように

なった。鎌倉時代後期から南北朝時代にかけては、こうした焼き方が盛んになり、瀬戸物の名前は全国的に知られるようになった。鎌倉・室町時代の窯は、平安時代のものに比べて規模が大きく、傾斜がより緩やかなところに築かれた。当時はまだ農業が主たる生産活動であり、農作業の合間をぬいながら、武士・豪族・寺院・名主層向けのやきものが焼かれた。良質な粘土や大量の燃料を確保するには多くの労力を必要としたため、共同作業で行われるのが一般的であった。

戦国の世になると、あいつぐ戦乱のために、大口需要者である武士や寺院とのつながりが失われた。このため瀬戸の窯業は一時的に衰退を余儀なくされたが、やがて織田信長・豊臣秀吉などによって陶業が保護・振興されるようになり、再び隆盛をもちかえした。特に信長は、やきものの生産と取引に関する規則をしたためた制札を瀬戸の市日に立て、領内の陶業保護に力を入れた。当時流行した茶の湯も、陶業が盛んになった理由の一つといえよう。

(2) 近世以後の発展

尾張藩祖の徳川義直は、戦国の世に美濃地方に逃れた陶工を迎え入れたのをはじめ、瀬戸・赤津・品野3カ村の窯場免租、窯元への資金貸与などを行って、陶業を保護した。同時に、「陶業の世襲制度」「永代ロクロ挺の制度」「一家一人の制度」（次男以下は就業禁止）を定めて、統制を行った。また、焼成品はすべて水野代官所の役人立ち会いの下で、御蔵会所に納められ

た。このようにして、瀬戸地方の窯業は尾張藩の御用窯の時代を迎えた。

先に述べた水野代官所は、^{くらいれち}蔵入地（年貢を藩主に納める田）の支配や領民の世話をするために設けられたが、これとは別に領内の山林を管理するため御林^{おはやしかた}方奉行所が置かれた。瀬戸地域では、燃料を確保するために森林を無計画に伐採してきたため災害が多く発生した。このため、計画的伐採・植林・砂防工事が御林方奉行所の重要な仕事となった。水野代官所の支配地下の瀬戸地域には18の村があり、文政5年（1822）の総人口は7,586人、同じく石高は8,320.7石であった。

陶業が盛んになるにつれて、陶土の採掘や森林の伐採で山地が荒れ、豪雨のたびに瀬戸川沿いの田畑は大きな被害を受けた。このため被害農民は藩へ出掛けていき、生産の制限を強く訴えた。農民と窯元の対立は、陶土山をめぐる起こったこともあった。すなわち、農民は収入を増やすために自ら陶土を採掘して窯元に売り歩いたが、その陶土山の所有権を主張する窯元との間で対立が生じたのである。耕地が狭くて年貢も重かった農民の中には、農閑期を利用して物資輸送の仕事を行う者も現れた。名古屋と信濃方面の中間にあたる瀬戸地域では、^{ちゅうま}中馬街道や三州街道と呼ばれる交通路が集落の中を通過しており、各種の生活物資が中継され運ばれた。

尾張藩の御用窯として瀬戸の陶業は保護されたが、18世紀後半になると、肥前・有田で純白の染付磁器の生産が活発になり、

このために瀬戸の陶器は売れゆきが悪化した。しかし、磁器製法を学んだ加藤民吉の帰郷を契機として、徐々にではあるが瀬戸地方でも磁器が生産されるようになった。尾張藩は、名古屋の陶器問屋や瀬戸地方の窯元から30名を選んで蔵元を置く一方、江戸・大坂・京都には指定商人を置いて陶磁器を独占的に販売するしくみをつくった。蔵元の商人は一手販売で利益をあげることができ、冥加金として1割、益金の一部を尾張藩に納めた。窯元は荷代金の1割を藩に納める一方、借金の利息や運賃の名目で2割を商人に天引きされた。

このように、瀬戸の陶業は尾張藩の保護と統制の下で江戸時代を過ごした。しかし、尾張藩が名古屋藩と犬山藩に分かれ、さらに名古屋県から愛知県の一部になっていった明治初期には、このような封建的諸制度は廃止された。激しい社会変化の下で、瀬戸の陶業は一時的に混乱をみたが、やがて独自に発展の道を求めるべく、国内外の市場に向けて活発な活動が開始された。海外市場を重視した明治期以降の瀬戸の窯業が、その後の瀬戸の進路を大きく規定していったことは、すでに述べた通りである。

（林 上）

参考文献

- 九原常雄（1971）：『瀬戸—土と火の町』日本放送協会，p. 257.
 山川一年（1979）：『瀬戸 市制50周年記念誌』瀬戸市市制50周年記念誌編集委員会，所収，pp. 99～112.